

皇位繼承の歴史（二） 「外祖權柄の始まり」

高田 友

藤家は、奈良初期不比等の息四兄弟ありしも、七三七年、痘瘡の流行に據りて、悉く逝世す。然れども、房前に始まる北家、平安の代に入りて、俄かに權勢を増し、爾來嫡系とこそはなりたりけれ。よく不比等の威を恢弘して、再び朝廷を席捲するに至る。

房前の子は眞楯、眞楯の子は内麻呂、内麻呂の子は冬嗣なり。冬嗣出生は未だ奈良、其の子の代より平安の生れなりと知れば、時代の推移を判ずるに便たるべし。

冬嗣は神野親王（嵯峨天皇）に仕へて重用せられ、嵯峨・淳和の御代に一の上（左大臣）に任ぜられ、さらに太政大臣を追贈せられて、閑院大臣と稱へらる。

冬嗣は十指に餘る子を成し、名高きは長良・良房・順子の三人。

まづは、年少の妹なれど、順子の正良親王（仁明）に入内するあり。ただし、皇太子に入内したる當初は、「御息所」と呼ばれ、即位の後に女御たり。而して十九歳にて道康親王（文徳天皇）を生む。この外戚たるを以て、父と兄の頭角を現す所以となる。

長良（ながら・ながよし）は道康親王に仕へて出頭したれども、道康（文徳）登極あらせられてより、次第に弟冬房に官途の後れを取り、冬房一の上となるも、權中納言を極官（きよくくわん・ごくくわん）として、八五六年五十五歳にて薨去す。

長良、爲人甚だ穩かにして、和を以て第一と爲す。冬房の後塵を拜するも些かも嫉視することなく、その昵懇たるや微笑ましきものあり。冬房また兄を待み、諸事談ひけるとぞ。

冬房男子出生なきのゆゑを以て、兄の子基經を養子とし、以後基經の末裔藤原嫡流となる。血統を辿れば、五攝家の祖は冬房にあらずして、長良たり。

冬房の子は一女子あるのみ。位人臣を極めたる人にして、何爲子尠かるべきと訝りたまふらめど、冬房の妻は、嵯峨天皇皇女潔姫なり。昭和の今太閤の女婿に見らるるが如く、權力者の娘を妻にしたれば、すなはち蓄妾のこと憚りあるべし。密かに子を作りたるの段はなきにしもあらずと思はるれど、世に知られず。

平安初期の皇家に不可思議なる偶然は、著名なる皇族に同年の生れなる方々多かりしの條なり。嵯峨天皇と異母弟淳和天皇は同年の生れ。仁明天皇と正子内親王（淳和皇后）は雙子（檀林皇后所生）。而して、これが潔姫また、異母の所生なれど、仁明・正子と同年の生れなり。なほ、潔姫、冬房に嫁ぎたまへるは、皇女臣下に降嫁せられたるの濫觴なり。（良房妹順子は潔姫より一歳の年長にして、これもまた潔姫と並びて美女の譽高し）

潔姫所生の女子は明子。「あきらけいこ」と訓むが定説なり。また、後世、道長の娘にて一條天皇の中宮皇后たりし彰子も「あきらけいこ」と訓みたりけんとの説あり。

明子は道康親王（文徳）の御息所となる。文徳は順子の所生なれば、すなはち從兄に嫁ぎたるなり。この人、母（潔姫）に似たる解語の花にして、「染殿の后」と讚へらる。「染殿（そめいどの）」とは良房邸の謂ひなり。文徳即位の八五〇年に惟仁親王を生み奉る。すなはち、天皇の諱に「仁」を附するの嚆矢なり。惟仁親王當歳にして皇太子に立てられ、九歳にして踐祚あらせらる。すなはち清和天皇にておはします。

清和天皇、母（明子）も祖母（潔姫と順子）も傾國の美女なれば、容儀頗る優にして、着座あらせらるれば威風邊あたりにを拂ふの趣あり。然れども、天は二物を與へずとの謂ひ眞なりや、其の言動異様なる所ありと傳へらるるが定かならず。

そもそも、御母明子、三十代の頃より物の怪に悩まされ、晩年は監禁せられたるが如くにしてぞ畢んぬる。

清和天皇の女御にして、貞明親王（陽成天皇）の生母たるは藤原高子たかこ。長良女にて、基經の同母妹（六歳差）におはしますが、基經とは仲睦まじからぬ兄妹。政治的對立ありたるがゆゑに、基經は妹に對抗して、我が娘の頼子と佳珠子かずこを清和天皇（基經の半血の甥）に入内せしめ、佳珠子は貞辰親王さだしむきを生み奉る。すなはち、叔母高子のライバルとぞなりにける。

高子には醜聞あり。入内前に在原業平に籠絡せられて、缺落を圖る。その顛末は伊勢物語の記す所なり。また、我が子陽成退位あらせられたる後、五十五歳の砌に僧と密通したるの咎ありて、兄基經に皇太后の位を剝奪せらる。

陽成天皇また祖母（明子）と母（高子）の血を承けたまひけるか、尋常ならざる言動多し。剩へ、八八三年在位七年にして、宮中にて乳兄弟めのつとじを撲殺するの椿事ちんじゆつたい出來して（冤罪の疑ひあり）、いまだ十七歳にして退位を強要せらる。

台閣には、基經外孫貞辰親王もしくは外甥貞保親王（陽成同母弟／高子所生）を皇嗣に推戴するの聲高かりしかども、基經は肯ぜずして、仁明皇子時康親王を立てて光孝天皇（五十四歳）と爲し奉る。すなはち、先代陽成天皇の大叔父（祖父の弟）にあらせらる。また、新帝の母・藤原澤子は基經の母・乙春の姊にておはします。

このとき、新帝に比定せられたる中に、かの承和の變にて廢太子せられたる恒貞親王（陽成の祖父の從兄）あり。五十九歳にておはします。すでに落飾せられたるのゆゑを以て御辭退あらせらるるも、思はぬ人の歴史再登場の例として感慨盡くるなし。

光孝天皇、恩人たる基經に憚る所多く、其の奏請悉く聽きれたまひ、次代宇多天皇（光孝皇子）の御代には、基經を一の所（一人）攝政關白／このときは關白）に任じて、攝關の世を聞きくを聽ゆるしたまへるに至る。

（平成三十年五月十日受附）